

# 2025 年度 自己点検・評価報告書

教育学部評価分科会

2026 年 2 月

## 基準4 教育課程・学習成果

### 1. 学修に関するもの

学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。また、学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

#### 【1】今年度の自己点検・評価の方針・改善計画

##### ① 学修成果の測定方法

※学部のアセスメントプランを活用した測定方法を検討ください。

学生の意見聴取でも述べるが、教育学部では、学期での学修を振り返るリフレクション・アワー（以下、RH）を2024年度から全学年を対象に実施している。今年度もRHを実施し、振り返りの結果を踏まえて評価する。また、科目ごとの成績評価に基づいて、数量的な側面から評価について検討する。

##### ② 効果的な教育を行うための工夫（シラバス、授業形態、履修計画の指導等）

2024年度に実施した同僚会議において、受講生のニーズを定期的に把握しながらの運営やフィードバックの基準の設定や、授業を通じた学生間のコミュニティ形成などを次年度に取り入れていくことが検討された。

2025年度では、必修科目の「初年次セミナー」と、ほぼ全ての学生が履修する「教職概論」において、毎回の授業でランダムに座席指定することで、学生間のコミュニケーションを活性化した。その目的は、授業内での発言や質問を促すために、心理的安全性を高めることであった。この試みの成果について、授業アンケートの結果などを踏まえて、評価した。

#### 【2】今年度の自己点検・評価結果

##### ① 学修成果の測定結果

###### ●リフレクション・アワーの実施

本年度は、1～3年生を対象に学期の振り返り時期にリフレクション・アワー（RH）を実施し、LOs 自己評価とグループ対話を組み合わせて、学修成果の可視化と内省を促進した。実施枠は学年の実情に応じて、ガイダンス／必修科目／演習等を活用して運用した。所見の傾向として、複数学年で「他者の履修内容を知れた」「新しい視点を得た」「次学期の見通しが立った」などが確認され、対話を通じた言語化が学習意欲の回復・向上に寄与したことが示唆された。

###### 【運用上の課題】

- ・RH 所見を授業設計へ結び付ける際の、所見の取り扱い（最小手順）が未整備である。
- ・同時間帯に100名以上が一斉入力した後、集計上で一部未保存となる事象を確認した。個別の未送信ではない可能性があり、原因の特定には至っていない。

2025年12月に2025年度の教育学部新任教員による同僚会議を実施した。目的は「講義の中で活用するグループワークについて、学生の学びにとって最適化された方法は何かについて検討すること」であった。新任教員4名とコーチ役の教員1名によって行われた。新任教員間では、特に資格（教職や公認心理師）取得に必須とされる科目では、従来座学形式中心で行われてきた膨大な知識についての

網羅的な伝達と、「演習形式による学習の質の向上をいかに両立させるか」という課題が共有された。その課題に対して、座学で得た知識を具体的な事例に当てはめるミニワークや、重要概念を学生同士で説明し合うアウトプットの時間を設けることで、一方向的な講義以上に知識の定着率が高まる可能性が示唆された。こうした方法を次年度以降授業に取り入れていくことを話し合った。

② 効果的な教育を行うための工夫（シラバス、授業形態、履修計画の指導等）

心理的安全性を高めることで授業内での発言や質問を促すために、1年生全員が参加する「初年次セミナー」と、ほとんどの1年生が履修する「教職概論」のほぼ全ての回、及び3年次教職必修の「教育の方法と技術」の3分の2程度の回で、ランダムに座席を指定して4人1組のグループを構成するようにした。その結果、対話活動や議論においてコミュニケーションを活性化できただけでなく、学生間の多様な組合せによって、学生たちの視点や観点が多様化した。授業アンケートにおいても、概ね肯定的な意見を得ることができた。

## 2. 教育課程に関するもの

教育課程の編成・実施方針に基づき、学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

### 【1】今年度の自己点検・評価の方針・改善計画

① ナンバリング、ディプロマ・ポリシーと開講科目・成績の照らし合わせ

2023年度と2024年度の2年度にわたるデータに基づいて、ナンバリングと、ディプロマ・ポリシー（の評価項目LOs）との関連について分析し、適切な配置となっているかについて検討する。

改善の計画としては、100番台の授業担当者への情報提供と、低学力層の学生の状態を考慮して授業の内容と方法を改善するよう依頼することが挙げられる。

### 【2】今年度の自己点検・評価結果

① ナンバリング、ディプロマ・ポリシーと開講科目・成績の照らし合わせ

まず、ナンバリング、ディプロマ・ポリシーとの関係について昨年度までの状況について述べる。

教育学部のディプロマ・ポリシーの評価項目（LOs）は概ね、LOs1からLOs5へと要求される知識や能力の水準が高くなるように設定されている。

LOs1：教育学および心理学に関する知識を身につける。

LOs2：自らの考えを適切に表現し、伝えられる。

LOs3：論理的あるいは実践的に課題を考察できる。

LOs4：課題解決に向けて協働して取り組む。

LOs5：課題解決に際し、多様な意見や視点を踏まえ新たな価値創造ができる。

ナンバリング（番台）とLOsの関係について、学科ごとに述べる。なお、教育学部では、演習I～IVと卒業研究I,IIは、教育学科と児童教育学科で共通開講されているため、別枠で扱う。また、2023

年度と 2024 年度の 2 年度にわたるデータを集計しているため、多くの科目で二重にカウントされており、◎と○の数は半分にするこゝとで、およそその実数が得られる。

教育学科については以下の通り、ナンバリング（番台）が増すごとに、LOs1 から LOs5 へと移行するように構成されている。また、LOs3 が最も多く、LOs4 が最も少ない。

ナンバリング (番台)	LOs1		LOs2		LOs3		LOs4		LOs5		総計	
	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○
100	29	1		34	9	32		10	6	6	44	83
200	19	24	10	48	28	30	5	15	12	22	74	139
300	18	14	2	35	31	36	9	14	13	27	73	126
400	4			3		4		1		2	4	10
総計	70	39	12	120	68	102	14	40	31	57	195	358
LOs ごとゝの総計	109		132		170		54		88		553	

児童教育学科についても同様に、以下の通り、ナンバリング（番台）が増すごとに、LOs1 から LOs5 へと移行するように構成されている。LOs3 が最も多く、LOs4 が最も少ないことも同様である。

ナンバリング (番台)	LOs1		LOs2		LOs3		LOs4		LOs5		総計	
	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○
100	37	16	10	27	8	46	1	21	10	13	66	123
200	25	9	10	28	19	35	8	44	15	23	77	139
300	27	1	8	21	11	33	4	15	3	18	53	88
400	3			4		6			3		6	10
総計	92	26	28	80	38	120	13	80	31	54	202	360
LOs ごとゝの総計	118		108		158		93		85		562	

演習 I~IV と卒業研究 I, II については、300 番台と 400 番台で大きな差は見られない。LOs3 が最も多く、LOs4 が最も少ないことは、上記と同様である。

ナンバリング (番台)	LOs1		LOs2		LOs3		LOs4		LOs5		総計	
	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○
300	41	41	29	85	49	81	6	50	30	36	155	293
400	27	29	25	88	47	76	9	41	37	47	145	281
総計	68	70	54	173	96	157	15	91	67	83	300	574
LOs ごとゝの総計	138		227		253		106		150		874	

前年度までの、演習（I~IV）・卒業研究（I, II）を除いた成績（2023 年度、2024 年度）について、ナンバリング（番台）ごとの成績評価の平均は、以下の通りである。

教育学科では、2 年次に配当されることが多い 200 番台では成績がやや下がるものの、1 年次から 3 年次で成績について概ね変化は無く、400 番台で向上している。両者の関係について Spearman の順位相関を求めたところ、 $r = .12, p > .05$  であり、有意な相関は見られなかった。

児童教育学科では、2 年次から 3 年次での上昇は僅かであるが、ナンバリング（番台）が上がるにつれて成績が向上している。教育学科と同様に Spearman の順位相関を求めたところ、 $r = .21, p < .01$  であり、有意ではあるものの弱い相関が見られた。

ナンバリング (番台)	教育学科	児童教育学科
100	3.08	2.99
200	3.03	3.20
300	3.10	3.22
400	3.43	3.31

成績評価の第一四分位 (Q1)、中央値 (Q2)、第三四分位 (Q3) について、ナンバリング (番台) ごとの平均は次の通りである。

ナンバリング (番台)	教育学科			児童教育学科		
	Q1	Q2	Q3	Q1	Q2	Q3
100	2.72	3.23	3.68	2.70	3.12	3.49
200	2.69	3.19	3.61	2.93	3.30	3.71
300	2.80	3.19	3.59	2.92	3.33	3.66
400	3.28	3.42	3.72	2.98	3.38	3.64

教育学科については上記と同様、100 番台から 200 番台にかけて、成績評価が低下する傾向が読み取れる。児童教育学科についても、上記と同様の傾向が読み取れる。

教育学科では 100 番台と 200 番台で、児童教育学科では 100 番台で、Q1 が 2.70 (B-) 前後に止まっており、底上げが必要である。

### 3. 就学状況

#### 【1】2025 年度の自己点検・評価の方針・改善計画

##### ① 学籍異動の状況 (卒業、休学、退学の状況など)

教育学部の入学者、休学者、退学者の状況は以下の通りである。

教育学科

入学年度	在学		休学		卒業		人数	%	転学部・ 転学科	人数	%	退学	人数	%	全体 人数
	人数	%	人数	%	48カ月	54カ月									
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数
2021	12	14.0%		0.0%	63	73.3%	2	2.3%	65	75.6%	1	1.2%	8	9.3%	86
2022	67	93.1%	2	2.8%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	3	4.2%	72
2023	65	90.3%	4	5.6%		0.0%		0.0%		0.0%	1	1.4%	2	2.8%	72
2024	81	92.0%	4	4.5%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	3	3.4%	88
2025	84	96.6%	2	2.3%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	1	1.1%	87
<b>総計</b>	<b>309</b>	<b>76.3%</b>	<b>12</b>	<b>3.0%</b>	<b>63</b>	<b>15.6%</b>	<b>2</b>	<b>0.5%</b>	<b>65</b>	<b>16.0%</b>	<b>2</b>	<b>0.5%</b>	<b>17</b>	<b>4.2%</b>	<b>405</b>
<b>総計</b>	<b>309</b>	<b>76.3%</b>	<b>12</b>	<b>3.0%</b>	<b>63</b>	<b>15.6%</b>	<b>2</b>	<b>0.5%</b>	<b>65</b>	<b>16.0%</b>	<b>2</b>	<b>0.5%</b>	<b>17</b>	<b>4.2%</b>	<b>405</b>

児童教育学科

入学年度	在学		休学		卒業		人数	%	転学部・ 転学科	人数	%	退学	人数	%	全体 人数
	人数	%	人数	%	48カ月	54カ月									
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数
2021	9	9.2%	3	3.1%	76	77.6%	3	3.1%	79	80.6%			7	7.1%	98
2022	75	87.2%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%			11	12.8%	86
2023	96	94.1%	3	2.9%		0.0%		0.0%		0.0%			3	2.9%	102
2024	98	96.1%	1	1.0%		0.0%		0.0%		0.0%			3	2.9%	102
2025	84	97.7%	1	1.2%		0.0%		0.0%		0.0%			1	1.2%	86
<b>総計</b>	<b>362</b>	<b>76.4%</b>	<b>8</b>	<b>1.7%</b>	<b>76</b>	<b>16.0%</b>	<b>3</b>	<b>0.6%</b>	<b>79</b>	<b>16.7%</b>			<b>25</b>	<b>5.3%</b>	<b>474</b>

全学

入学年度	在学		休学		卒業		人数	%	転学部・ 転学科	人数	%	退学	人数	%	全体 人数
	人数	%	人数	%	48カ月以下	54カ月									
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数
2021	254	16.6%	43	2.8%	1085	70.7%	16	1.0%	1101	71.8%	9	0.6%	127	8.3%	1534
2022	1160	83.3%	132	9.5%	1	0.1%		0.0%	1	0.1%	11	0.8%	89	6.4%	1393
2023	1157	91.0%	57	4.5%		0.0%		0.0%		0.0%	10	0.8%	48	3.8%	1272
2024	1228	93.8%	24	1.8%		0.0%		0.0%		0.0%	9	0.7%	48	3.7%	1309
2025	1227	97.2%	23	1.8%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	12	1.0%	1262
<b>総計</b>	<b>5026</b>	<b>74.2%</b>	<b>279</b>	<b>4.1%</b>	<b>1086</b>	<b>16.0%</b>	<b>16</b>	<b>0.2%</b>	<b>1102</b>	<b>16.3%</b>	<b>39</b>	<b>0.6%</b>	<b>324</b>	<b>4.8%</b>	<b>6770</b>

教育学科では、旧カリの2021年度入学生で1割弱の学生が退学しており、全学の割合よりもやや多い。2021年度は定員を上回っているものの、大学での学修に適応できないにも関わらず、入学してしまった学生が少なくなかったと考えられる（GPAの分布も検討したい）。2023年度は、休学が全学平均をやや上回っている。また、2024年度は全学平均の2倍強の4.5%（4名）が休学している。

児童教育学科では、旧カリの2021年度入学生で全学平均に近い7.1%（7名）の学生、2022年度入学生では、全学平均の2倍にあたる12.8%（11名）の学生が退学している。両年度とも定員割れの状態であり、やはり、大学での学修に適応できない入学者が少なくなかったことが読み取れる（GPAの分布も検討したい）。

2023カリキュラム以降の2023,2024年度入学生について、教育学科では休学者がやや目立っているが、退学者は減っている。児童教育学科では2023年度で休学者が目立つものの、他は落ち着いている状況である。

ただし2025年度入学生について、教育学科は2024年度と同様に定員を1割程度、超過していることから今後、休学者が増える可能性を捨てきれない。児童教育学科は2022年度と同様に定員割れしており、今後、注視する必要がある。

2021年度の卒業生について、教育学科では、73.3%が卒業しているが在学中の学生が少なくない。教育学科の学生は、私費留学のために1年間休学する学生が一定数おり、その結果、5年目においても在学している学生がやや多いと考えられる。児童教育学科については、77.6%が卒業している。児童教育学科においても同様に私費留学のために休学する学生がいるが、教育学科ほど多くはない。両学科とも、私費留学のような学修上の目的による理由ではなく、心身の不調や疾病による休学が原因の学生、さらに学業不振による卒業単位不足の学生も加味して、5年次になっても在学している学生がいると考えられる（休学中の学生の理由を調査したい）。

2025年度についても同様に、卒業、休学、退学の実数、及び割合、それらの全学との比較を元に、評価する。

改善の計画としては、アドバイザー教員による学生のモニターと注意喚起、教授会での情報の共有の強化が挙げられる。

## 【2】今年度の自己点検・評価結果

### ① 学籍異動の状況（卒業、休学、退学の状況など）

データ

## 4. 改善計画

### 【3】今年度の点検・評価に基づいた改善計画

#### ① 短期計画（アセスメント実施後1～2年の期間で実現可能な改善策）

##### ●リフレクションアワーについて

#### ① 実施回数・実施形態の見直し

学年の学修状況やRHの必要性を踏まえ、実施回数や実施形態（ガイダンス／授業内／演習内）の適正化を検討する。

#### ② データ運用の最適化

今年度、同時間帯に多数が一斉入力した後、集計上で一部未保存となる事象が確認された（原因特定には至らず）。次年度は、現行運用の範囲で、短時間の入力分散（2～3分のピークカット）、即時バックアップ（CSV出力／シート複製）を実施し、再発防止を図る。

#### ③ フィードバック

収集したデータをどのように授業の質向上につなげるか、効果的な活用方法を検討する。

#### ④ データ収集の効率化（既存ツールの範囲内）

Google Classroom等の連携可否を把握し、改善の選択肢を確保する。

#### ② 中長期計画（アセスメント実施後3～5年の期間で取り組む改善計画）

なし

## 基準5 学生の受け入れ

### 1. 学生の受け入れのための広報活動全般について、適切に実施しているか。

- ・オープンキャンパスにおける取り組み
- ・授業体験や姉妹校との連携事業などの実施状況

#### 【1】昨年度の自己点検・評価で課題となった事項および今年度の方針・改善計画

24年度の取り組みの一つとして、広報予算100万円を活用し、「教育学部ダイジェスト映像のYouTube広告配信」を実施した。本施策は、大学進学を迷っている層を含む高校生への訴求を目的とし、「PASCAL入試・チャレンジプログラム」のエントリー開始(1月27日[月])に合わせて、1月末より広告配信を開始した。最終成果は次のとおりである。表示回数:612,023、視聴回数:315,863、視聴率:51.6%、クリック数:482、クリック率:0.08%、となっている。視聴率は51.6%と高水準であったものの、18歳以下の層に限定した広告配信ができない仕様のため、実際に高校生層へどの程度訴求できたかは現時点では不明である。また、設定範囲である18-24歳の区分に高校生が含まれている可能性はあるものの、詳細な人数の把握は困難である。今後は、オープンキャンパス参加者やPASCALチャレンジプログラムへのエントリー者を対象に、参加やエントリーのきっかけとなった情報源やYouTube広告の視聴有無などを確認する簡易アンケートの導入も検討した。

■2025年度の主な取り組みは以下の通りである。

・2026年度に名称変更となる「心理・教育学科」の受験者層へのアピールとして、2025年11月に学習管理アプリ「Studyplus」に広告記事を出稿し(<https://www.studyplus.jp/2489>)、アプリ上で約8万件的通知を行った。

・飯村ゼミおよび「心理・教育学科」での取り組みを紹介する2本のショート動画を制作し、大学公式Instagramにて公開した。

(動画①: <https://www.instagram.com/reel/DSWqkZxkkdU/?igsh=MTQ5czJqcWozNXJqOA==> | 動画②: <https://www.instagram.com/reel/DTbsCzJEkzH/?igsh=MTZ5eGhkejNsamp1aQ==>)

・受験生、特に小学校教職志望者を対象とした、本学の特色ある教職課程に関する広報物を作成した。

※上山先生を中心に展開(参考: 右上資料 <https://www.soka.ac.jp/admissions/guide/>)。

・各回のオープンキャンパス終了後、参加できなかった高校生向けに、体験授業等の内容や様子を教育学部HP(NEWS)にて継続的に発信している。

・現在、受験生や進路選択を考える高校生を対象に、教育学部の授業に焦点を当てた学生視点でのショート動画を制作中である。学部HPおよび他媒体での公開を検討している。※学生・舟生先生を中心に準備中。

OCについては、午前の部では、体験授業のテーマに多様性を含ませながらローテーションし、参加

者の多様な興味・関心に応えるための体験授業を設定した（心理系4回・教育系3回）。正午・午後の部では、卒業生である現職の小学校教諭や幼稚園教諭、保育士を招き、実体験型の幼稚園・小学校関連の企画を開催した（幼稚園2回・小学校7回）。体験授業・企画の開催時間については、過去に参加者の少ない傾向が見られた時間帯は実施しないように改善した。また、試行的な取り組みとして、保育者志望の高校生のニーズに親身に寄り添えるよう、参加者が気軽に在学生へ相談することが可能な幼保カフェを開催した（5回）。さらに、環境設定は昨年と同様、参加者に体験授業・企画の魅力や詳細がより伝わるよう、教育学部棟1階の受付付近のデジタルサイネージで視覚的にそれらをアピールした。これらに加え、相談コーナーでは、参加者が在学生に相談しやすいよう音楽も流すと同時に、在学生のリアルな声を引き出せるよう、高校生の座席を保護者よりも前にするなど座席配置を改善した。これらの結果、一定の相談者数を確保することに繋がった。今年度の相談者は、高校1年生38名・高校2年生74名・高校3年生96名・その他14名の合計222名であった。

■授業体験や姉妹校との連携事業の実施状況

・今年度は、東京創価学園小学5年生を対象とした「国語」と「音楽・美術」に関する体験授業を上山、足立・堀館が担当した。また、中高生対象としては、東京創価高校2年生向け模擬授業を富岡が担当し、関西創価高校2年生向け体験授業を毛利・舟生が担当した（アドミッションズセンター管轄）。さらに、関西創価中学3年生を戸田が、東京創価中学2年生を上山が担当した（総務部管轄）。学部別ガイダンスや懇談会、入学準備ガイダンス等についても、各教員が分担し、いずれも積極的に取り組んでいる。

【2】今年度の取組みに関する点検・評価結果

教育学部のHP（NEWS）にて6回、発信・掲載した。今後は、月に数回程度の発信・掲載すべきであると考えます。

OCでは、体験授業と相談コーナーに注力している。体験授業は、心理系4回、教育学系3回、教育実践系（小学校）7回、教育実践系（幼稚園）2回を実施した。また、イベントとして、保育カフェを5回、実施した。相談コーナーの参加者数については次の通りであり、5月と9月は少ないものの、8月は一定の参加者を獲得できていたと言える。また、相談コーナーを利用した高校3年生が5月と8月では89名となっており、受験生獲得に向けて一定の効果があったと考えられる。

月日	受け付け	体験授業	相談コーナー				計
			高1	高2	高3	その他	
5/3	69	33	2	5	18	4	29
5/4	36	23	4	3	15	0	22
8/2	108	記録なし	4	15	31	3	53
8/3	99	記録なし	10	20	20	1	51
8/24	98	記録なし	12	21	5	3	41
9/21	47	記録なし	6	10	7	3	26
計	457	56	38	74	96	14	222

夢ナビ講義の動画については、6人の教員によるものが公開されているが、2025年4月～2026年2月6日のアクセス数の総計が、講義動画サービス1992回、MIXサイト494回であり、仮想的な研究室訪問である夢ナビライブの参加者が582名であった。

#### ■点検・評価結果

・「キャンパスガイド2025」では、教育学部紹介ページを抜本的に見直した。心理学、臨床心理士、教育学、教員養成課程など、各分野の教員と連携しながら内容を再構成し、挿絵やデザイン面にもこだわって制作を進めた。これまで、教育学、心理学、幼・小学校教職課程と部署ごとに個別で行っていた広報活動を、教員が協力して取り組む形に転換したことで、受験生により興味を持ってもらえる内容に仕上がったと考える。また、この取り組みを通して、教員自身の学部広報への意識が高まった点も大きな成果であった。

・今年度の入試状況において、児童教育学科は現段階で入学定員を満たしており、上記キャンパスガイドをご覧いただいた成果も一定程度含まれていると考えている。

#### 【3】今年度の点検・評価に基づいた改善計画結果

<短期計画（アセスメント実施後1～2年の期間で実現可能な改善策）>

・今後の課題として、受験を考える高校生が必要な情報によりアクセスしやすくなるよう、また心理・教育学部の受験者増も視野に入れ、学部HPの表示方法や内容の改善を含むリニューアル（紙媒体や動画を含めた他の媒体による広報活動を含む）を検討していきたい。

<中長期計画（アセスメント実施後3～5年の期間で取り組む改善計画）>

なし

2. 合格者に対する入学前教育等を適切に実施しているか。また入学後の学生に必要な支援（リメディアル教育・初年次教育等）を実施しているか。

#### 【1】昨年度の自己点検・評価で課題となった事項および今年度の方針・改善計画

##### 【入学前教育】

25年度の合格者に対する入学前教育プログラムは、総合型選抜や一般選抜合格者に対してオンラインによる交流・学習会を2、3月に実施した（欠席者に対してアーカイブ配信も実施）。昨年度の自己点検を通じて、SA主体の運営や信仰によって、小グループ交流の時間を調整し、SA対新入生だけでなく、新入生同士で話す機会を増やした。Web学修進捗の状況を共有し、友人同士で学び合う機会の創出によって、学修の不安解消を図った。また、チャレンジ課題では「哲学対話」を取り入れた。大学紹介や履修、キャリア形成に関する話題を通じた小グループの交流会は好評を得ている。特に、大学で

の学びや生活の具体的なイメージができることで不安が解消され、大学に入ることが楽しみになったという感想が多い。一方で、新入生同士での交流と、高校から大学への学びを接続し、楽しく学び合う体験を促進するような機会の提供、出席率の改善が次年度以降の改善点であると考えられる。

#### ・2025年度

25年度の合格者に対する入学前教育プログラムは、総合型選抜や一般選抜合格者に対してオンラインによる交流会を2、3月に計3回実施した。また、入学前課題は、2025年度実施の初年次セミナーと対応する形で、「学びほぐし」の観点を取り入れつつ、課題の取り組み方の自由度を上げ、興味・関心に応じて分野を選択できるような実施形態を取った。具体的には、これまで教育学部の初年次教育全般に用いられてきた読み物教材を、分野別・難易度別に複数提示したこと、選択した読み物課題に対し、他者にわかりやすく説明あるいは推薦するための文書作成課題に変更したこと、教育学部教員の授業動画（夢ナビ動画）を視聴することを前提とした課題を設定したことなどが挙げられる。今年度初めて実施した項目も多いため、その効果の検証については、今後の初年次教育全体を通して検討し、次年度の入学前プログラムの改善へと接続していく必要があると考える。

### 【初年次教育】

#### ・2024年度

24年度の初年次教育の取り組みは、初年次セミナーを中心に行った。担当教員・(総括)SAが受講生の出欠率・課題提出率・タスク管理状況などを継続的にモニターし、新入生の大学適応を促した。また、低学力層・合理的配慮が必要な学生がいた場合、学部教員や学内関連部署との連携や加配SAを手配し、対応した。その結果、成績不振等の発生を未然に予防でき、一定の成果があった。また、昨年度は、提出課題に対するフィードバックをSAと共にを行い、課題提出のインセンティブになるようにした。提出物をチェックする体制を取り入れたが、フィードバックの仕方や基準の曖昧さ等は今後の課題となった。

#### ・2025年度

2025年度の初年次教育については、「初年次セミナー」において、個別的で、知識伝達型・正解主義の学習観から、社会的・協同的に知識やスキルを構成する学習観への転換を促すような「学びほぐし」を試みることにした。その理由は、これまで実施してきたリメディアル教育では、低学力層に対する効果に明らかな限界が見られたためである。そのような学生らは、高校までに身につけてしまった知識伝達型・正解主義の学習観によって、学びを楽しめない、義務的な作業であるとして捉えてしまい、学びが利他的なものになり、継続的なものとならず、往々にして学修に結びつかないからである。そこで「初年次セミナー」では、SAの助力を得ながら他の学生と協力し、かまどづくりやカレー作りに取り組む「野外炊さん活動」や、学びたい内容を自由に選択して活動する「課題別探究クラス」を設け、「学びを愉しむ」機会が増えるように工夫する。

### 【2】今年度の取組みに関する点検・評価結果

総合型選抜合格者に対する入学前プログラムでは、オンラインでの新入生同士での交流の機会を増

やすと共に、読解課題に対して、SAがフィードバックしたり、新入生同士で相互閲覧できる機会を提供した。ただし、出席率の改善については、今後も検討する余地がある。

また、25年度から、学園推薦による合格者に対して、26年度入学生から入学前プログラムを実施した。新入生同士での交流だけでなく、東西の創価小学校における学校参観や、夢ナビ動画と読解教材を用いた課題を出すなど、学習の機会を設けた。提出された各種課題の記述内容からは、多くの新入生が主体的かつ深く学んでいる様子が認められた。

初年次教育では、初年次セミナーにおける「学びほぐし」を試みたが、学生の様子からは学習観を捉え直した者が多くいることが窺え、一定の効果があつたと言える。数量的な調査を行っていないため、次年度は、質問紙調査を実施して分析するなどの課題がある。

### 【3】今年度の点検・評価に基づいた改善計画結果

<短期計画（アセスメント実施後1～2年の期間で実現可能な改善策）>

なし

<中長期計画（アセスメント実施後3～5年の期間で取り組む改善計画）>

なし

### 学生の意見聴取

主として以下の観点を参考に、今年度の点検・評価および今後の方針を記入してください。

- 履修、授業、LOsに関すること
  - ・ 全学の教育目標や3つのポリシーを認識していたか
  - ・ 履修科目を決める際に、その科目のラーニング・アウトカムズを意識したか
  - ・ 自身の学びを自己点検しているか  
(履修科目のラーニング・アウトカムズの修得や、授業アンケートの自己評価について)
  - ・ 今後、DPに掲げる能力を身に付けることが期待できるか
- 昨年度の学生からの意見聴取を受けて取り組んだ事項について
  - ・ 学生からの意見を受けて検討および実施した取り組み等のフィードバック
- 学生生活全般に関することや機構として意見交換した事項

### 【1】昨年度の自己点検・評価で課題となった事項および今年度の方針・改善計画

2024年度に実施した、初年次セミナー担当者と学生アシスタント（以下、SA）と同僚会議において、受講生のニーズを定期的に把握しながらの運営やフィードバックの基準の設定や、授業を通じた学生

間のコミュニティ形成などを次年度に取り入れていくことが検討された。2025年度では、初年次セミナー、教職概論など、大学1年生時に必修となる科目において、授業ごとの（毎回異なる）座席指定により、学生間のコミュニティ形成に寄与する。また、学校研究（2年生）、授業技術（3年生）など、複数教員が担当する授業においては、授業での様子や提出課題の状況などを踏まえ、授業運営ならびにフィードバックの機会増加を目指す。一方、取り組み状況を、他の教員に報告する機会等は少なかったため、今後、各授業での創意工夫を、より広範に共有していく必要があると考える。

リフレクション・アワー（以下、RH）は2023年度に1・2年生を対象に先行実施し、2024年度から全学年に展開している。主要課題として、①授業時間を2回使用することへの教員の懸念、②フィードバックの方法、③FD担当教員の負担、④RHに対して意識が低い学生へのアプローチが挙げられる。2025年度はこれらの課題を踏まえ、実施回数を学年別に調整することにより、学生の意識向上を図っていく。また、フィードバックについては他大学の取り組みも参考にしながら、内容を検討していく。

## 【2】今年度の取り組みに関する点検・評価

### 前半についてのみ

学生間のコミュニティ形成やその基盤となる心理的安全性の確保に寄与するために、「教職概論」や「初年次セミナー」において、ほぼ毎回の授業でランダムに座席指定することを試みた。4人1組のグループをランダムに構成するようにした結果、対話活動や議論においてコミュニケーションを活性化することができた。また、学生間の多様な組合せを実現したことによって、学生たちの視点や観点を多様化することにつながった。授業アンケートにおいても、概ね肯定的な意見を得ることができた。

「学校研究」では受講学生の実態を踏まえて、学校現場で臨機応変な対応が求められるケースについて多角的に議論する時間や、小学校での勤務経験があるゲスト講師による特別授業を複数回実施することにより、授業運営の方法に関する改善を試みた。また、授業後にケースについて発展的に探究したい学生やゲスト講師に追加で質問をしたい学生がいた場合には、車座になってディスカッションをする時間を授業時間外に設けることにより、フィードバックの機会増加を目指した。

「授業技術」については、模擬授業をグループで観察し、改善点等を議論する回が複数設定されている。その際、受講者から、「授業の記録を鮮明に残したい」「授業後もふりかえることができるようにできれば」との要望から、模擬授業を撮影し、映像記録から分析・議論する時間を授業内でも確保した。その他にも、模擬授業実施回の実設計に関しては、実施回数や学年・教科・単元を、受講者のニーズに応じて計画し、複数教室での同時実施により、限られた授業コマ数の中での実践的な学びに充てる時間の確保に努めた。

取り組み状況を他学部の教員に報告する機会として、初年次セミナーでの、野外炊さん活動を取り入れるなどによって学生の学習観を転換することを目指した取り組みについては、10月4日（土）に学内で開催の教育フォーラム分科会において報告した。また、授業（「教育原論」、「教職概論」、「教育の

方法と技術)での学修に関する学生の主観的な効果や実感を動画にまとめ、広報活動に活用するとともに、学部教員の間で共有した。

2025 度のリフレクション・アワー (RH) における事前課題および事後課題の回答結果から自己評価から、学生の学び (LOs) に関する認識として以下の傾向がみられた。

※RH 実施状況： 1 年生=春・秋学期、2 年生=秋学期、3 年生=春学期、4 年生=未実施

協働 (LOs4) や表現・伝達 (LOs2) については、いずれの学年でも自己評価が比較的高い。特に 1 年生および 3 年生では「とてもできた」の割合が 60~70%の範囲で確認でき、授業内でのグループ活動や発表の機会が、学びの促進につながっていることがうかがえる。知識 (LOs1) に関しても概ね安定した到達感が見られ、2 年生・3 年生も含めて「理解できている」とする記述が比較的多い。反面、論理的・実践的な考察 (LOs3) や多様な視点の統合・価値創造 (LOs5) の自己評価は相対的に低めで、個人差も残る。1 年生では LOs3 が春→秋で低下し、「根拠付けが難しい」「論理的にまとめる力に不安」といった記述が複数みられる。同様に LOs5 も秋学期に評価が下がる傾向が確認できる。多くの学生が「協働」「表現」はこのまま伸ばしたい、さらに高めたいと前向きに自己評価している。一方で、「論理的思考 (LOs3)」「多様な視点の統合・価値創造 (LOs5)」は今後伸ばしたい・強化したいという声が多い。したがって、これらは 4 年生において重点的に伸長が期待される領域といえる。

### 【3】今年度の点検・評価に基づいた改善計画

<短期計画 (アセスメント実施後 1~2 年の期間で実現可能な改善策) >

- ・学生の省察を継続的に可視化し、その質的成熟を促進する。
- ・省察の定着と高度化を図り、学修成果 (LOs) との接続を強める。
- ・省察の可視化とフィードバックの循環を整備し、論証・統合の習得を支援する。

<中長期計画 (アセスメント実施後 3~5 年の期間で取り組む改善計画) >

なし